

森の階調

正会員 浅野言朗君

部分として多様であるが、全体として一様である、木と森の関係性を本作品「森の階調」に見出すことができた。

別荘とはいえ通年の滞在を想定しているため、用途に応じた多様な空間が求められた。個性ある立方体として設定された各室には随所に開口部が設けられ、そのすべてに、多様であり一様でもある唐松林が映り込む。こうして多様な部分に共通項が設定される。また、天井に勾配があり、立方体相互の壁面をそろえた効果であろうか、各室の連続性が高く、住みこなされた内部からは立方体の単位を看取できない。特徴的であった立方体の境界が曖昧化する一方で、その構造・仕上げ・色彩においてさまざまな差異を持ち込んだことで、単一の指標による秩序の形成を退け、建物全体としての一様感をうみだすことにつながっている。

建築の存在感を強調させつつ環境に溶け込ませる、この逆説に取り組み、応えた、意欲にあふれた作品といえる。

(「作品選集 2013」選評より)